引揚60周年記念の集い
～いま後世に語り継ぐこと～

平成18年11月27日(月)　九段会館大ホール（入場無料）

第一部

○主催者代表挨拶
○慰霊・黙祷
○基調講演
「満洲引揚げの実態について」
講師　加藤聖文（人間文化研究機構・国文学研究資料館）
○懐かしい歌を聴き、唱う
中澤桂（ソプラノ歌手）／梅澤薫（バリトン歌手）

第二部

○シンポジウム
「私にとっての満洲～いま語り継ぐこと～」
岩見隆夫／高野悦子／なかにし礼／藤原作弥／山田洋次

総合司会　須磨佳津江（元ＮＨＫアナウンサー）

主催：(社)国際善隣協会／東北地区連合会　　後援：ＮＨＫ　　協賛：(財)満鉄会

シンポジウム

～いま後世に語り継ぐこと～

パネリスト

岩見　隆夫（政治評論家）

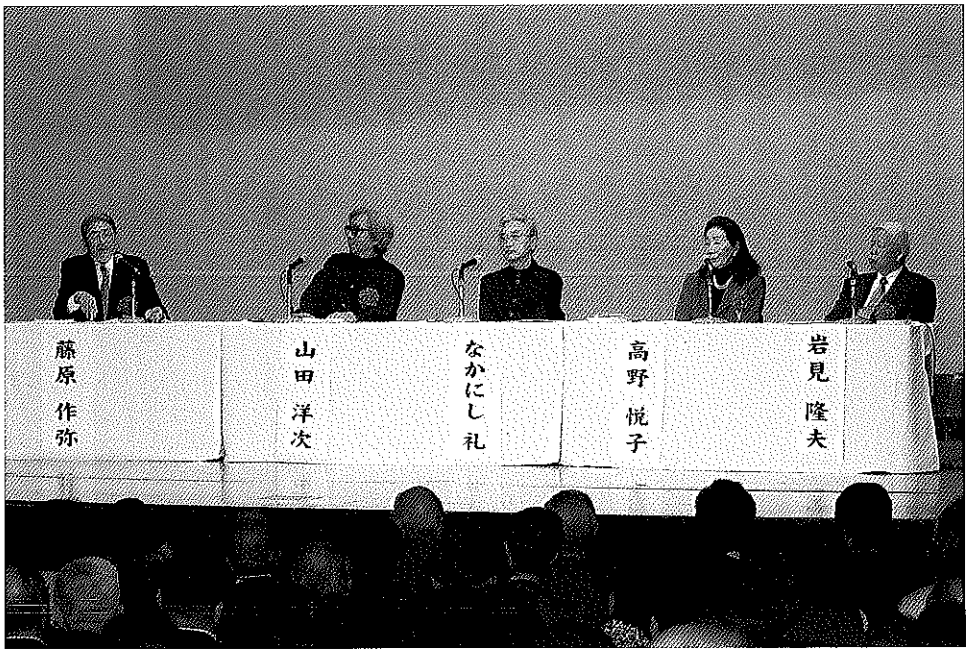
高野　悦子（岩波ホール総支配人）

なかにし　礼（作家）

山田　洋次（映画監督）

（兼）コーディネーター

藤原　作弥（前日本銀行副総裁　現日立総研社長）



【藤原作弥】

皆様こんにちは。お忙しい中、またお天気の悪い中、よくお運びいただきました。超満員でございます。六〇周年目にあたって、満洲からの引揚げについて直接の当事者はもちろん、今の日本の方々が如何に関心を持ってくださっているか、ということがここに表われていると思います。今日の集いの第二部はシンポジウムでございます。旧満洲から引揚げてこられた方々、満洲体験をお待ちの方々、各界の著名な方々にお集まりいただきまして、それぞれの満洲体験を「私の体験」としてお話ししていただき、それをみんなで満洲ということ、その後の日本ということを考えていくよすがにしたいと思います。

それではご出席の方々をご紹介申し上げます。左から政治評論家の岩見隆夫さん、一九三五年満洲の大連でお生まれになり、一九四七年、大連よりお引揚げになりました。京都大学をご卒業後、毎日新聞に入社、政治部記者として広く活躍、ただいまではほぼ毎朝のように、テレビで政治コメントを拝聴しております。

次に高野悦子さん。岩波ホール総支配人でいらっしゃいます。高野さんも一九二九年大連のお生まれ。奉天、瀋陽や大連に居住されまして一九四五年五月、敗戦の三ヵ月前にご帰国なさいました。日本女子大をご卒業後、東宝株式会社にお入りになり、その後パリ高等映画学院監督科をご卒業、以後岩波ホールを創立されて総支配人に就任され、広く映画文化の活動に従事、二〇〇四年度には文化功労者に選ばれております。ご著書も多数でして、岩波ホール総支配人の他、現在東京国立近代美術館フィルムセンターの名誉館長もつとめていらっしゃいます。

次に、なかにし礼さんです。なかにしさんは一九三八年牡丹江市のお生まれ。一九四五年八月の敗戦のとき、その牡丹江を脱出してハルビンにのがれ、ハルビンで終戦をお迎えになりました。一九四六年葫芦島より引揚げられました。立教大学フランス文学科をご卒業後、作家活動に入られましたが、演劇、音楽、文学。文学の中には詩の訳から、作詞から小説やら、台本やら演出、出版…と、枚挙に

いとまがありません。日本レコード大賞を三回、同作詞賞を二回受賞されております他、作家としては直木賞を受賞されました。いくつかの作品がございますが、満洲からの引揚げの体験を描かれた作品に「赤い月」がございまして、映画化、テレビドラマ化もされております。近作はロシア残留孤児を描いた「戦場のニーナ」で、来年一月刊行です。それから広い総合舞台芸術のジャンルも開拓、私もこのあいだ拝見したのですが、世界劇『黄金の刻』というパフォーマンスを武道館で催されました。

山田洋次さん。ご存知の映画監督でいらっしゃいます。一九三一年大阪にお生まれになり、少年期をハルビン、新京、長春、奉天、瀋陽、大連等々で過ごされ、一九四七年、大連より引揚げられました。東京大学法学部卒業後、松竹に入社、映画監督としてのご活躍は皆さんよくご存知だと思います。ブルーリボン賞監督賞や日本アカデミー賞監督賞等々、これも枚挙にいとまがありません。最近私は公開に先立ち、試写で「武士の一分」を観賞させていただきました。

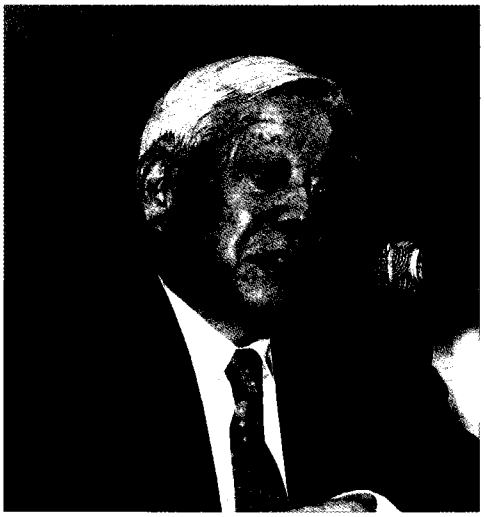
不肖私は藤原作弥と申しまして、一九三七年仙台市で生まれたのですが、父の仕事の関係で昭和一七年、太平洋戦争勃発の直後に今の北朝鮮に渡りまして、それから満蒙方面を徘徊、ソ満国境、と言ってもお分かりにならないでしょうが、現在の内モンゴル自治区のウランホトといいますが、ソ連と旧モンゴル人民共和国との国境近くの僻地に住んでおりました。ソ連軍の侵攻により現地を脱出し、南満洲の安東にのがれ、昭和二〇年の八月から、二一年の一〇月まで安東で難民生活を送り、二一年の秋に引揚げてまいりました。職業はずっと新聞記者をしておりましたが、運命の悪いいたずらで、一九九八年に日本銀行などという場違いなところに入り、バブル崩壊の金融システムのたて直しを五年間やらせていただきました。現在は日立総研というシンクタンクで、ジャーナリストの延長戦上のような仕事をしております。よろしくお願いいたします。

というわけで、お一人お一人にまず満洲体験からお話しいただきたいと思います。どういう切り口からでも結構です。

まず第一ラウンドを満洲体験、第二ラウンドをそこからお考えになったこと、というふうに分けてすすめさせていただきたいと思います。

「温故知新」というのは孟子の言葉ですが、「古きをたずねて」を第一ラウンドに据え、「新しきを知る」を第二ラウンドに設定してみました。まず岩見さんからお話しいただけますか。

【岩見隆夫】



私の在満期間は少年時代の一一年四ヵ月です。大連で生まれまして、佐世保港に貨物船で引揚げるまでの期間です。そのときに初めて祖国を見たわけで、まったくの満洲二世の一人です。その後約六十年経っているわけですが、色々とあと知恵で満洲とは一体何だったのかということは考えざるを得なかったわけですが、今日はそういうことは捨象にして、私にとっての満洲、少年時代の満洲とは何だったのか、ということをこの数日色々と思い起こしているわけです。

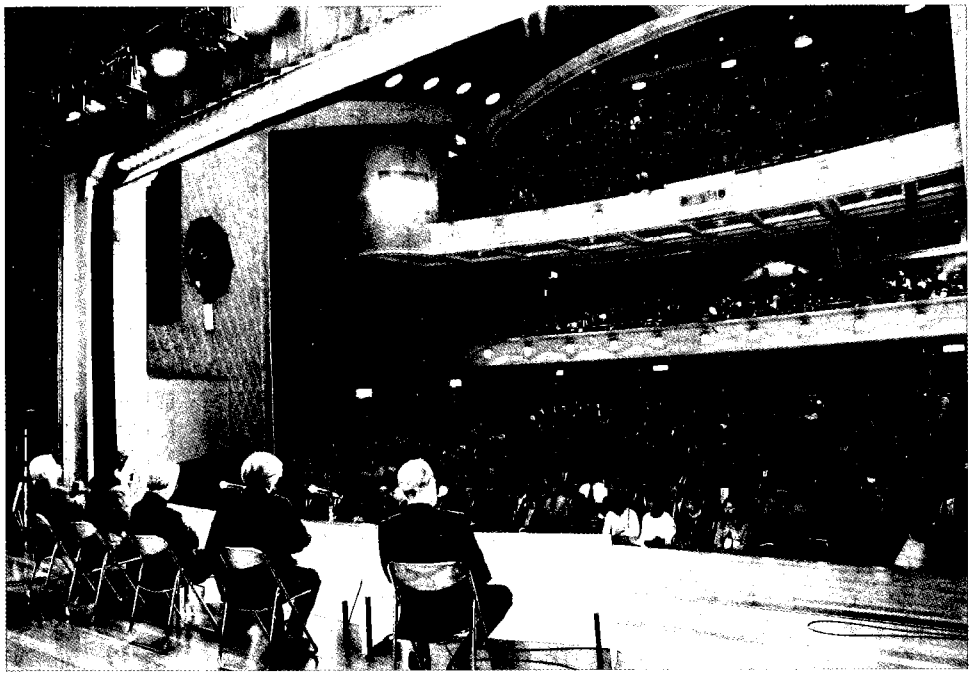
それは一言で申し上げると、わがうるわしのふるさとという言葉ぐらいしか浮かんでこないわけです。とにかく少年時代ですから色々な妄想をするわけですが、馬賊になりたい、とわりあい本気で考えた記憶があります。あの満洲は、少年にそういうことを思わせる何か底深い神通力みたいなものがあったと思います。それから私の意識の中ではやはり「匂い」です。大連の町で特に食べ物屋の前を通ったときの匂いが、いまだに鼻に残っております。この匂いばかりは横浜の中華街に行っても残念ながらにおえません。これはやはりただ懐かしさばかりです。

私は戦後山口県の田舎で育ったわけで、ここも大変好きです。しかし、なんというのでしょう、凝縮度においてまったく比較にならないわけです。こんない歳になりましても、まだ「満洲」という言葉を聞いただけで、何か心の中に灯がともるような、そんな感じがします。満洲ナントカ症候群、みたいな感じでいるわけです。

もう一つ私にとっての敗戦体験がございまして、これは塗炭の苦しみを味わわれた方々には大変恐縮なのですが、私にとっての敗戦体験は痛快の一語に尽きるわけです。これは敗戦から引揚げるまでの一年半ほどの短い期間ですが、当時私は一〇歳で、一二歳の兄と二人でヤミ煙草の小売商をやりました。これが意外にもうかりました。当時ほとんどのご家庭は、父親は失職して生活力を失っているわけで、子供が何かしなければならないという時期でした。

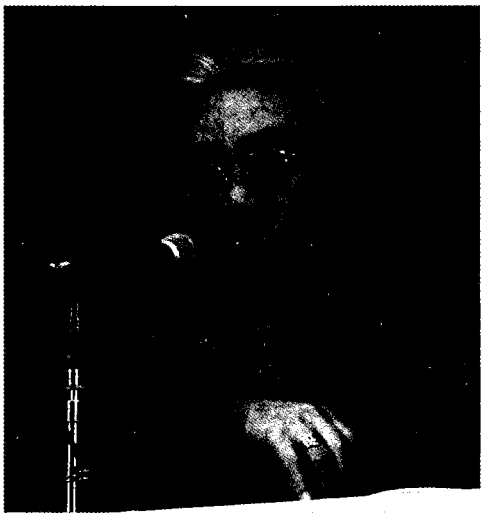
私に多少商才があったのではないかと思うのですが、この水あげで、一年半七人家族が生活したわけです。私はなんとなく一家の主導権を握ったかのような錯覚を持った記憶があります。これは大変エキサイティングな日々でした。私は七一年間の人生の中で、この一年半が最も凝縮して光輝いているわけで、あとは大したことないわけです。

悲劇もたくさん経験しました。先ほどの加藤先生のお話のように私どもはパーロとかロスケとかよく言っておりましたが、この連中の狼藉ぶりは並大抵ではありませんでしたが、そういうこともみな非常に痛快なヤミ商売のひきたて役をやってくれたような、そういう感じで私は満洲というものを見てきたわけです。敗戦はとにかく悲惨です。ですが私にとっては、ご批判を覚悟で申し上げると、大変おもしろかったと言わざるを得ないわけです。



【なかにし礼】

私は一九三八年に牡丹江市で生まれました。両親は昭和九年に、北海道の小樽から、造り酒屋をやろうということで牡丹江に渡りました。のちに見た満洲紳士録には、昭和一一年にすでに親父の名前が載っていて、兄と姉の名前もあります。というわけで、大変短期間で仕事が成功したようです。そして昭和一三年、一九三八年に生まれました。



生まれてしばらくの幼少期は、まるでゆりかごの中でうたた寝をしているような時代を過ごしましたが、一九四五年の八月九日にソ連軍がソ満国境をこえて攻撃してきた日、そのゆりかごの中でうたた寝している少年は、七歳になる寸前だったのですが、枕を蹴られるようにたたき起こされ、そこから自分の人生がにわかに始まったのです。急に震度5の激震が走る大地の上に生かされた、という感じでした。

満洲が崩壊するということはまさにそういうようなことでした。中国人の暴動はあり、ソ連軍の爆撃はあり、そしてまた避難しようとする人々は駅前に山のような人だかりをなしていました。中西家は日頃から関東軍に酒を納めているよしみから、関東軍とかけあい、軍用列車にのせてもらって牡丹江を脱出しました。

これは大変うしろめたい話です。避難列車を待つたくさんの人たちを駅に残し、我々は駅から離れたところに夜陰にまぎれてひっそりととめてある列車の中にもぐり込んで脱出しました。このうしろめたさは今でもずっと続いておりますけれど、しかしこういう選択をしたのは、当時親父が酒造組合の出張で不在だったため、母がくだした結論なのです。しかしこれが必ずしも正しかったわけではありません。

まだ戦争は続いていますから、軍用列車であったがために、翌日からソ連機の爆撃の対象になり、さまざまな攻撃を受けて目の前で人々が死んでゆきました。その死んだ人たちを窓から捨て、弾があたらなかったということだけが、今思えば幸運だったのです。その幸運だけをたよりに、みんなで体をヒモでつなぎ川を渡り、とにかくハルビンにたどり着きま

した。とりあえず転がりこんだホテルではソ連軍兵士が目の前でピストルを撃ち、耳のそばを弾がかすめ、それがうしろのガラス窓を割ってふるえ上がった、という経験もしました。そこから次は収容所に入って収容所生活を送りました。

このことは皆さんも経験なさったでしょうから詳しくは語りませんけれども、そこで父と再会しましたが、父はあまりの絶望に落魄し、精神的にまいってしまって、四五歳までの男性がソ連軍の強制収容所につれていかれる男狩りというのがあったのですけれど、当時四六歳の父は、自分がそれに行かないのは日本男児にもとる、ということで、行ってしまいました。三ヵ月後に帰ってきたのですが、栄養失調と過労で肺壊疽を患っており、死にました。

このように、私の満洲体験というのは、まず自分が生まれたふるさとである満洲というものを失い、生まれ育った家、財産を失い、そして父を失い、で、ハルビンの町かどで、うちは岩見さんほどの商才がなかったものですから母と姉が煙草、密売でない煙草を売っていました(笑)。私はそれを手伝うべく、まわりをウロウロしてソ連の兵隊をみつけては母と姉のところにひっぱってきて、煙草を買ってくれ、と言ってました。ちょっとしたセールスのお手伝いをした程度です。当時七歳ですから、まだまだ華々しい履歴はなかったのですが、冬の寒い中をチョロチョロしておりました。

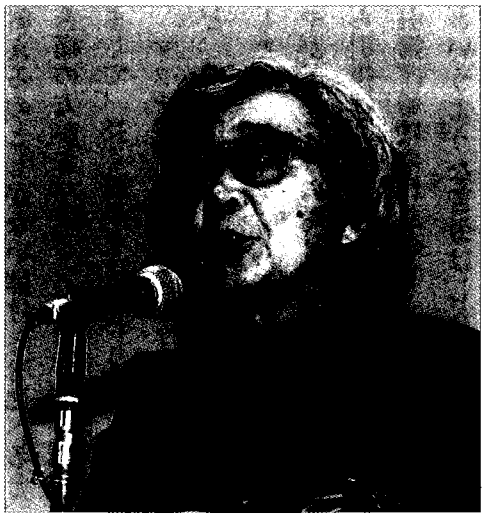
そしてついに引揚げのときが来て、日本にたどり着いたのですが、私にとって日本という国ははじめて見る国であり、八歳までいた満洲の、中国大陸というもので育て上げられた八年間というものは、やはり大きいものがありました。日本へ帰ってきてから六〇年になりますが、いまだ日本に、そこで心落ち着くという町が不思議とないのです。

後年ハルビンにも牡丹江にも行きましたけれど、牡丹江の町に着いたときの匂い、空気、人の顔色、とびかう言葉。テレビの取材で行ったのですが、カメラが回っていなかったら桑田投手のように大地に口づけしたのではないかなと、それほどの思いを感じました。この匂いだけはどうにもなりませんね。

というわけで私の場合は悲惨な思い出が多いものですから、満洲というと心にポッと灯がともる岩見さんがむしろうらやましい。私の場合は満洲というと目の中にうっすらと涙が浮かび、むこうの景色がプリズムでかすむかな、とそういう感じです。

【山田洋次】

びっくりしています。こんなにたくさんの方が会場に来られるとは予想もしていなかったし、国際善隣協会はこんなに広い会場を借りて大丈夫なのか心配していました。それが今日来てみたら廊下に人があふれていて、一体これは何だろう、とことばを失った状態で、今でもなんとなくぼんやりしている有様です。



ここにおられる皆さん方は一人ひとり語り出せば何時間もかかる満洲体験を持っておられるわけですよね。中にはとてもつらい、思い出したくもない記憶の持ち主もおられるはずで、それに比べれば僕の満洲体験は語るほどのことではないような気もします。僕の父は満鉄のエンジニアでした。生まれたのは大阪でしたが、もの心が付いたのは奉天です。それからハルビンに行き、さらに新京で小学校に入学、それからまた奉天にもどる。ここでは加茂小学校にいました。その後一時満鉄の東京支社に転勤となったので、三年ほど東京にいました。虎ノ門の現在三井船舶の本社が建っているところに支社がありましたが、今思えばあそこは単なる鉄道会社ではなくて、日本政府の満洲という植民地政策のためのシンクタンクでもあったのだろう、と思います。

昭和一九年にまた父が大連に転勤になり、そこで敗戦になりました。ですから岩見さんと同じ時代を僕は共有しているわけです。やはり岩見さんと同じように父の仕事がなくなって収入がないから、色々なものを売って生活していました。少年の僕は、岩見さんは煙草だそうですが、僕はピーナッツを売っていました。

問屋というか、中国人の親方の家に行って仕入れて、新聞紙を三角に折ってそこに入れて。ソ連の軍票の時代ですけれど、小さいのが一〇円、大きいのが二〇円というかたちで、箱に並べて町に立って売るのです。なにせろくなものを食べていないのですから、ピーナッツというのはすばらしいぜいたくな食べ物です。だから売っているうちにどうしても食べたくなる。ひと粒食べると、隣の袋にも手を出す。だんだん減っていくから、ひと袋をつぶしてならすことになる。それでも食べたくて仕方がない。その苦痛に

耐えるのとしがない儲けとを比べると、苦痛の方がよっぽどつらいような気がしまして、長く続かずに終わりました。

マッチ売りの少女というのがあるけれど、僕の場合はピーナッツ売りの少年でした。一年半のうちに学校もなくなり、やがて引揚げの順番が来ました。奥地から引揚げた方々に比べれば、港から直接引揚げ船に乗れたので、貨物列車に乗るというような苦労はしなくてすみました。

寒い雪の降る日、大連港を出航する引揚船をソ連の将校が一人で見送るのです。デッキに立つ引揚者たちは大声で悪口を、バカヤローとかなんとか言って、罵声をあびせ、夢に見ていた日本に帰るのですが、博多の港に入ったら頭の上をアメリカの飛行機がブンブン飛ぶし、アメリカの軍艦が沢山泊まっているし、波止場にアメリカの兵隊がズラーッと並んでいる。その姿がソ連の兵隊と全然違う。ピシッとプレスのきいた服を着て、血色がよく、日本人とは全く違う高級な人種という感じがして、この連中に監視される中でＤＤＴを頭からぶっかけられて、なんだかひどくみじめな気持ちになり、なんだ、これは僕たちが夢見てきた祖国とだいぶ違う、これはソ連の占領から解放されたのではなくて、アメリカに占領された国に帰ってきたにすぎないんだと、ひどくがっかりした記憶があります。

それから山口県の田舎で過ごした何年間かは本当に大変でした。皆さんもそうでしょうが、引揚者は田舎ではよそ者扱いです。学校に行ってもいじめられる。大体ことばが違いますから、何か言うと生意気だと。頑張っていい成績をとると、おまえなんかがいい成績とりやがって、と嫌味を言われる。くやしくて早くこんな田舎からとび出してやるんだ、と思い続けていたような時代でした。それに近いようなことは皆さんも体験なさっていると思います。

でも、結局それは僕にとってとても貴重な時代だったなと思うのです。あのつらい時代が僕の映画人になってからの仕事に大きく影響しているはずで、それは決して悪い意味での影響ではないだろうと。たとえば僕は『寅さん』という映画をたくさん作りましたけれども、寅さんという人間に対する見方が僕の中に育ったのは、きっと敗戦後の内地でつらいつらい日々を過ごしたからではないかと思います。

満洲では決して会えなかったタイプの、たとえば炭坑労働者、在日朝鮮人の土方の親方とか、そういう人たちと触れ合うことの中で、人間と人間との新しいつながり方というか人情みたいなものに気が付くことができた、その体験は僕にとってとても貴重だったな、と今思い返したりするわけです。

【高野悦子】

私は一九四五年五月に日本に帰国しておりますので、お三方がお話しになられたような敗戦後の武勇伝も悲しい話もありません。先程加藤先生から満洲のこと、引揚げのことを一つの歴史として整然とお話をうかがい、大変勉強になりましたが、私がここでお話しすることはその加藤先生のお話の対極にあるような、きわめて個人的なものです。

私の父は満鉄のエンジニアで、鉄道の敷設、保線にかかわっていました。私と姉二人の三人娘は全員満洲生まれです。女子師範の教師をしておりました母の話によれば、父が国鉄に就職するという内定があって、仕事がずっと続けられるという人生計画で父との結婚を承知していたようです。

ところが突然ある日大連から父の手紙がとどいて、その中には船の切符が一枚入っていました。すぐ大連に来い、ということで何がなんだかさっぱりわからず大連に行きましたら、「広々としてすばらしいところだ。これから大きい仕事ができそうだし、友達もみんなおまえにふさわしいところだ、とすすめるから。」と父はもう満鉄に就職していました。母は約束が違うじゃないかと思いましたが、仕方なく結婚生活を送る中で、父は転々と住居を変えていく。

要するに鉄道を敷設するということは不便なところに仕事があり、母は日本人がたくさん住んでいる大連とか奉天とかハルビンでしたら仕事が続けられたのですが、田舎まわりだったので、教育者の夢は捨てました。だから、わが家においては満洲というと父のものでした。

私は今日の出演者の中で一番年長者のようです。みなさん一〇歳前後のお話ですが、私が引揚げた時は一六歳でした。私は一九二九年、大きな機関区のある大石橋で生まれ、一ヵ月後に大連に来ました。長姉は大連生まれの大連育ち、大連のことを話しますと、「あんた小ちゃくて何も知らないのよ」と言います。とにかく姉二人が何でも私より知っているので、我が家では満洲のことを私が口にするのも遠慮がちでした。

一九五八年、私は映画の勉強がしたく

てフランスに留学しました。父の選んだ満洲、私が選んだのはフランス、そういうふうに納得していたのです。しかし父が満鉄は一九〇六年に創立し、それから四〇年の歴史があるけれども、前半は先輩たちがつくり、育ててきた。我々はその満鉄を引き継ぎ葬式を出すことになった、と話しているのを聞くたびに、やはり満洲のことを思い出し、胸がキューンと痛むのです。

私はよく変った女性と言われます。しかし私が満洲育ちだとわかると、〝やっぱり〟と納得されるようです。

それからフランス留学中、私はよく中国人に間違えられました。私が大柄だからかと思っていましたが、私が、中国の悪口が出るとすぐ抗議するからだというのです。私はそんな記憶はないのですが、日本のことだって、中国のことだって、こどもだって間違ったことを言われたら抗議するのは当然だと思うのですが。〝満洲っ子〟には大和撫子と少し違ったところがあるのでしょうか。

父は一九八二年、八二歳で腹部大動脈の破裂で突然死にました。とても元気だったので親孝行はもうちょっとあと、ということで何一つ親孝行らしいことはしませんでしたが、父に死なれて呆然としました。姉二人は結婚しておりますので、結婚していない私が父の葬儀を仕切ることになりました。そのときにまずお寺のご住職が、黒龍院という法名をくださいました。中国の大きな河の名前を勝手につけていいのかと、私はちょっと躊躇したのですが、父の友達は皆さん「すばらしい、高野君にふさわしい」とおっしゃるのです。骨を拾っているときには、また誰ともなく「高野さんは満洲に骨を埋めようとした人だから、少し分骨しておこう。あの大陸を足で歩き回ったのだから、足の骨がいい」と。そして足の骨を少し分けて、主治医の方が新しいすり鉢を買ってきて骨を粉々にくだいてくださいました。

なぜ黒龍院かというと、父は鉄道が黒龍江に達したときが本当に一生の喜びだったと常々言っていたということなのです。それで私は父の一生の喜びが黒龍江にあったことを知りました。永久凍土層のある非常に寒い、マイナス四〇度から七〇度という霜柱が立つ大地に鉄道をひくのは難事業だったらしいのですが、それを克服できたときの喜びのようです。

また葬儀のとき父と仕事を共にした後輩、具島太三郎さん、この方のお兄様は満鉄調査部でご活躍なさった具島兼三郎先生ですが、その具島さんがおよみになった弔辞の中に、「敗戦のときに関東軍からの命令で、鉄道の重要書類や鉄橋、港湾を爆破するということを、高野さん

は命を張って阻止した。エンジニアはものをつくることであって決してものをこわすものではない。きちんとした形でそれを次の政権に渡した」と。もちろん父一人の力ではありません。敗戦後三ヵ月間、四〇〇人の鉄道関係者が集まって、青写真をつくったりということで、満鉄から一人も戦争責任者が出なかったというお話を聞いておりまして、親孝行しなかったことと、父にたてついてばかりいたことをとても申し訳なく思いました。

こんな話は皆様の前で言うことではないかもしれませんが、なんとか父の骨を満洲に返してやりたいと考えました。しかし、当時、黒龍江の黒河は、軍事施設のあるところ、ソビエトとの国境になるわけで、外国人は入ることができません。もちろん日本人などとんでもないという時代でした。それでも色々とチャンスを待って、一九八五年に、一番上の長姉と、父の供養を黒龍江ですることができました。そして、「黒龍江への旅」という本を一九八六年に出版しましたが、これが思いもよらず中国語で翻訳されることになりました。

長年、岩波ホールで中国映画を上映したいと思いながら、中国は大きな国、またすべてのことを政府が仕切っていますから、「あなたの劇場の入場人員は何人ですか」「はい二二〇です」というと一二億の民を持っている国からはどうもピンとこないらしくて、やりたい映画をなかなか上映できませんでした。ところが輸出入公団の総裁から連絡があり、あなたが大変中国を愛していることを「黒竜江之行」で知りました。あなたに中国映画をあげましょう、ということで、私が選んだのが、「芙蓉鎮」、監督は中国一番の謝晋さん。初めて文革を自らの手で批判する厳しい映画でした。

それが大成功を収めることによって、その後「乳泉村の子」という日本人残留孤児が主役である作品など、中国映画を情熱をもって上映することになりました。父の満洲は、いつの間にか私にとっての満洲であり、中国になりました。そこで過した私の人生の一五年間を消しゴムで消すことができないならば、また父が二五歳から四五歳という人生の中で最も大切な時期を捧げた中国とは、これから仲良く付き合っていかなければなりません。色々なことはあるでしょうけれど私は中国との友好を一生の仕事にしたいと思って今日まで生きてまいりました。

【藤原作弥】

ありがとうございました。私は司会者という立場とパネリスト、二つの立場ですが、まずパネリストに立ち帰って、少しお話しをさせていただきます。先程

安東で難民生活を送り昭和二一年の秋に引揚げて来たと言いましたが、私もその安東で働きました。

父は日本語の国語の教師でしたので古本屋のやとわれ番頭で働いていました。母は日本人の着ていた服、和服を中心の呉服屋のやとわれセールスガールとして働いていました。長男である私は母と一緒に家を出て父の古本屋に立ち寄って、そこを拠点にして商売にでかけていましたが、まず煙草製造工場に行って煙草を卸してきて、それをヤミ市で売りさばく仕事です。戦後のヤミ市は本当に得体の知れないところでして、今でいうと、あれがキャバレーか、あれが麻薬窟か、と思われるようなところで、比較的高級な煙草を売っていました。

私のすぐ下に弟がおり、その弟が下の妹二人の面倒を見て待っていて、夕方になりますと煙草売りを終えた私が、父の古本屋へ行き、古着屋から母が来、親子三人家路をたどる、という生活をしておりました。それでも売って食べていけるだけでも非常にラッキーだったと思います。

商売は非常に下手でした。岩見さんがあんなに儲けられたのが信じられないくらい。私はグループの中でも年少者だったので、いつもかつあげをくい、売り上げ金をとられたりしていました。しかし、私の場合は煙草売りが儲けになってもならなくても、これも岩見さんと同じく、別の意味で毎日が楽しくてしかたなかった。見るもの聞くものが珍しいものばかりだったからです。

安東以前までは満蒙の草原で羊や豚を相手に近所の現地の子供たちと遊んでいる。それは牧歌的な生活ですが刺激の少ない生活でしたので、安東という都会に出てきて、おいしいものはある、珍しいものはある。お祭りがあるといえば、おまえアルバイトをしろ、といわれてまず高脚踊りの龍の一番最初のお先き棒をかついでねり歩く。すると町かど町かどでふるまい酒をもらう。小学校六年生にもならないような者にふるまい酒をもどうかと思いますが、そこで煙草と酒をおぼえました。そのように色々なことがありましたが、日本へ帰ってきてもなかなか更生できずに、ようやく正道を歩き始めたのは高校を卒業して大学に入った頃ぐらいです。

いずれにせよ、当時は通う学校がありませんでしたから、岩見さんはちゃんと学業をおさめられたでしょうが、学校がなかったので勉強しません。父が日本語の古本屋でしたので本は読んでいましたが、算数が駄目です。国民学校二年、三年、四年、といえば、かけ算、割り算、按分、比例、云々と高等算数に移行する

過程。その基礎を覚えていないものですから日本に帰って来て二年年次を下げて編入したのですが、それでも駄目で、まず小学校で一学年遅れ、大学でもキャッチアップできず一年遅れ、社会人になってからも、というわけで、同じ年に生まれた人よりも人生、三～四年は遅れていたと思います。

しかしそういう中にも満洲で身につけた放浪癖といいますか好奇心というか、そういうものがＤＮＡとして私の中に植え付けられたのでしょう。それから新聞記者の道をその後歩くようになりました。新聞記者になりまして物書きとの二足のわらじをはいて、ノンフィクションなども書くようになったのですが、その安東で祖国に帰る日を待ちわびながら家族一同肩をよせ合って希望を持って生活したという物語が私の「満洲少国民の戦記」という本です。

それを書いて実は有頂天になっていたわけです。ところがしばらくしてガーンとうちのめされたような気持ちになりました。と言いますのはその取材の過程で、ほぼ取材が終わって本を書き終わってからです。新しい事実に出くわしたのです。その本を書いたころ私は作家として二～三冊本を書いておりまして、四五歳も過ぎていました。四五歳の人間が、敗戦時の八歳のときの新事実に出くわしたのです。新聞記者としてはなんと遅いスクープだったでしょう。

昭和二〇年の八月一〇日、ソ連軍が戦車軍団で侵攻してきたときに、たまたま父が奉職していたのは、父は満洲国軍のモンゴル人士官候補生に日本語を教えていたのですが、軍関係の学校に奉職していたということで情報がちょっと早く入り、現地の人たちと本来ならチームを組んで一緒に脱出するはずだったのが、学校の日本人の家族の避難団というのが急きょ編成されまして、一五〇名で上もなければ横もない無蓋車で現地を脱出し、先程言いました安東に三日かけてのがれることができたのです。

ところが、のがれることができない人が大部分でした。本来なら私が行動を一緒にするはずだった興安街という町の東半分の人たちは脱出が一日遅れました。一日おくれが二日遅れというふうになって、歩き出したのが一一日の午後、ちょうど当時の東北地方は暑さの中に雨が降っていてぬかってなかなか歩けない。徒歩で脱出した人は一二〇〇名いたといいます。

一人と一人の間隔が一メートルとしても、一二〇〇メートルののびきった人の糸です。成人男子は、国境守備隊にとられていましたので、女性、子供、お年寄り、つまり弱者集団だったのです。その

一行が八月一四日の午前一一時ごろ、となりの町の葛根廟という寺のそびえる丘の中腹に差しかかったときに、ヌッとそこから姿を表わしたのが一五台のソ連の戦車軍団と装甲車で、一斉攻撃が始まりました。四五分間の間にそこは地獄絵図と化し、一二〇〇名のうち一一〇〇名以上が死んでおります。

その事件を四五歳のときに知ったとき、本当にあたりかまわず泣きわめきました。なんでこんな悲劇があったのか。どうしてそんなことが起こったのか。私はその町の一学年一クラス国民学校の三年生でしたが、三〇名のクラスメートのうち二〇名は、その有名な「葛根廟事件」というソ連軍による日本民間人虐殺事件の中でいたいけな命を落としております。終戦時にソ連が侵入してきたときにその興安街という町にいて、現地を脱出して生き残って帰ってきて、先月も同窓会を松本で開いたのですが、生きているのは私を含め三人しかいません。三分の二は虐殺されました。残りの十人のうちの三人が、飽食の時代といわれる現在まで生きのびました。行方不明になった人もいます。

代々木のオリンピック青少年センターにボランティア活動の一環として面会に行ったときに、一人の残留孤児に会いました。彼女はクラスメートでした。そのクラスメートのその後の生活は非常に悲惨なものでした。彼女は日本に帰るか、そのまま東北地方にもどるかで悩んでいましたけれど、一週間日本にいるうちに、「この国は私の祖国かもしれないけれども私の住む場所ではないと悟った」と言って、養父母のもとに、自分の夫や子供や孫のいるところに帰って行きました。そういう運命の分かれ目の縮図を満洲体験を通じて、事後的にですが知り得たということは、私にとって大きな人生のレッスンでした。

満洲におけるそうした生活体験は私の人格形成の原点だったと思います。国府軍と八路軍との内戦がすでに始まっていましたから、銃殺刑も目撃しましたし、強盗、殺人、婦女暴行も毎日のように見ていたので、子供の目にうつったのは大人の悪の世界そのもの。それが私のその後の人間形成のもとになっていると思いますが、なによりも葛根廟事件で死んだ仲間がいたということをあとから発見したとき、私がその後背負ってきたのは原罪意識にも似たうしろめたさでした。それが今日まで私に新聞記者としてとにかくこの世のことは善でも悪でも何でもその事実を次の世代にメッセージとして伝えていく義務がある、と思ったわけです。司会のくせに長くなりました。

それで後半の部は先程申しましたよう

に、何がレッスンとなったか、これからの日本はどうなるのだろうか、それを満洲体験をふまえてご自身はどうお考えになるか…それだけではなくて結構です。何でも結構ですので、温故知新の「知新」の部についてお話をお聞かせいただきたいと思います。